

## 正宗白鳥と短歌

吉田 竜也

—

谷崎潤一郎や芥川龍之介などが有名だが、日本近代の多くの小説家たちは短歌創作の履歴を持っている。例えば田山花袋はその文学的活動の出発期において、桂園派の歌人松浦辰男に師事したことはよく知られており、『花袋歌集』（春陽堂、大7）も刊行している。<sup>①</sup>しかし正宗白鳥はどうであろうか。「詩人らしい天分は全く欠けてゐるのか、和歌俳句の類では人真似も出来なかつた」（『文壇的自叙伝』『中央公論』昭13・2〜7）と自ら述べているように、およそ詩的なものと無縁な存在とみなされているし、そして白鳥と短歌というテーマはこれまでの研究において問題とされてこなかつた。そこで『正宗白鳥全集』（福武書店、1983〜1986）にも収録されていない、正宗白鳥作の短歌二首を紹介したい。白鳥の文業において短歌とはさわめて珍しいものではないかと考えられるからだ。



利鎌洗ふ小川の水の手にぞしむ

冬は間近し遠が根の雪

白鳥

都にて懐かしかりし古郷の

春いとはしき昨日今日かな

白鳥

それぞれ、雲形模様が入った短冊（一枚横6センチ×縦36・2センチ）に墨書されている。短冊を白鳥より受け取ったのは小野田太久造。小野田とこの短冊をめぐって、以下の通り令孫からお話をうかがうことができた。

短冊を白鳥から受け取った年・月は定かではないが、太久造の子息が小学校に入る前のことであり、おそらく昭和十一年前後のことと思われる。

自宅で遊んでいた折、見知らぬ人が縁側に座っていたという。当初は「浮浪者」と思い父親の太久造にそれを伝えるが、その人物は旧知の正宗白鳥であった。二人はしばし会話し、その後白鳥が短冊に書いて子息に手渡したのが、先の短歌であった。

小野田太久造は明治十六年生まれ。白鳥より四歳年下ということになる。現在の片上小学校を卒業後、閉谷巒を経て現

在の早稲田大学へ進学した。すなわち白鳥と同じ学歴をたどっている。『片上小学校百年誌』（片上小学校創立100年記念事業実行委員会、昭47・3）に掲載されている「高等科卒業生名簿について」を見ると、「明治25年」の卒業生として正宗忠夫（白鳥の本名）が、「明治28年」には正宗家次男の敦夫が、「明治31年」には三男・得三郎、「明治33年」には四男・律四の名が載っている。得三郎と律四をはさんで「明治32年」に太久造の名が載っている。つまり正宗家の兄弟たちと同時期に同じ小学校に通っていたということである。また、自宅は岡山県和気郡和気町清水で、当時の国鉄和気駅への経路でもあり、こうした経緯から白鳥はじめ正宗家の人々との交流が始まったのではないかと、令孫は推測している。太久造は和気に帰郷し、農業に従事した。そして奇しくも白鳥と同じ昭和三十七年に逝去している。和歌をたしなみ、自宅を会場に近隣の人々としば歌会など催していた。多数の短冊が残っており、その中に白鳥の件の短冊があったということである。白鳥の詠んだ短歌に太久造が添削を加えたこともあったというエピソードを、令孫は父から聞いている。

次に、短歌の内容について検討してみる。「都にて……」の歌の季節は「春」だが、「利鎌……」の方は「冬は間近し」とあるように秋の終わりを詠んだものである。令孫によれば短冊は白鳥から同時に受け取ったようで、そうだとすればこの二首の間の季節の違いがまずは気にかかる。どちらかはあらかじめ準備したものか、現在から振り返って過去の時期を歌にしたものかと推測できる。

「利鎌……」の方は、冬を間近にした農村の情景を詠んだ、およそ素直な歌と考えられる。「都にて……」の方が、なぜ懐かしいはずの「古郷」の「春」が「いとほし」いものと感じられるのか。短歌を詠んだ時期が昭和十一年前後ということ踏まえると、まず浮かぶのが、昭和九年四月の父・浦二の死との関わりである。父の臨終を素材にした小説が白鳥にはいくつがある。「陳腐なる浮世」（『中央公論』昭9・9）には、父の臨終に立ち会うため帰省している一郎が、郷里に汽車が通るといふ噂を聞き「幾十日間か憂鬱の連続であつた彼れの心も、その噂によつて、稍々晴々した」とある。「今年春」（『早稲田文学』昭9・6）には「旧家の老主人は、中風に罹つてから、なほ十年の歳を保つてゐた。時々身体の変

調があつても、素質が強靱であるためか、いつも持ち直した」とあるが、この作品より約十年前に発表された小説「父子兄弟」(『新潮』大15・3)に、郷里の弟から父が卒倒し半身不随になったという知らせを受けた「私」が、「つひに来る時が来た」と思い、さらに「故郷のこと」が「心の中の煩ひ」になったり、また「幽鬱」に思えるといった様子が描かれている。「父子兄弟」の「私」と「陳腐なる浮世」「今年の春」の一郎に白鳥その人の投影を見るなら、白鳥はおよそ十年間故郷を厭わしく、気がかりなものと思いつつ続けたということにならう。

あるいは父の死後、家督相続をめぐって白鳥は、郷里に残って生家を切り盛りしてきた次弟敦夫と葛藤があつた可能性があるが、この問題との関わりも考えられる。もつとも兄弟間の葛藤について後藤亮は、白鳥は東京遊学と引き換えに家督相続を放棄しており、敦夫との間に軋轢はなかつたと論じている<sup>2</sup>。しかし松本鶴雄は、白鳥の「田園風景」(『群像』昭21・10)という小説に注目し、そこで引かれている旧約聖書の「エサウの羹」のエピソードが、家督権を「危うく失うところだった者の物語」の比喩になっており、この小説は白鳥に代わって家督を相続しようした「弟への憤懣、抗議の書」として読めると論じている<sup>3</sup>。松本説に従うなら、その兄弟間の葛藤も、白鳥の故郷を思う気持ちに陰りをもたらししていると考えられよう。

## 二

もちろん以上のような短歌についての解釈は、あくまで推測の域を出ないものである。ここでとりわけ注目したいのは次のことである。白鳥が短歌を残していたという事実、あるいは白鳥その人が短冊を差し出されて、この歌を詠み上げた、詠むことができたということである。そういった意味においても先の短冊は貴重な資料である。

白鳥は最晩年の昭和三十七年に宮中歌会始の陪聴をしているが、その際の感想「歌会始め」陪聴記」において「和歌に

ついでは何も知らない」(『読売新聞』夕刊、昭37・1・13)と記している。そしてこの文章で自身の少年時代を振り返って「頼山陽などの漢詩を朗吟するばかりでなく、自分で人まねに漢詩を作つたりしてゐたが、和歌をつくつたことはなかつた。和歌より漢詩の方が好きであつた」と述べている。しかし「和歌をつくつたことはなかつた」という晩年の白鳥の回想は、事実を逸している。

よく知られているように、白鳥の先祖、近親者には和歌に親しんだ者が多い。曾祖父雅敦、雅敦の弟直胤はそれぞれ歌人。曾祖母鹿野も歌を詠んでいる。こうした人々の影響からか、白鳥の生まれた村は和歌や狂歌が盛んな土地柄であつた。白鳥自身「村全体に歌読みが随分多く、祖母は勿論親戚や出入りの知人は大概歌を読んだものだ、僕も亦その一人であつた」(『或る意味に於て』『二階の窓』『秀才文壇』明42・8)と回想している。「歌読みが随分多」<sup>(4)</sup>という環境のもと、白鳥もまた作歌していたというのである。さらにいえば白鳥の従弟岡田眞(母の生家の当主となる)もまた中村憲吉、土屋文明らに師事した歌人であつた。そして白鳥の二歳下の弟、正宗敦夫である。

白鳥は明治二十九年、十七歳にして上京し東京専門学校に通うが、その後郷里に残る敦夫に宛て多くの手紙を書いており、『正宗白鳥全集』第三十卷(福武書店、1986)でそれを読むことができる。これらの書簡からは、後に歌人となる敦夫のみならず、白鳥においても短歌への並々ならぬ関心があつた様子がうかがえる。

明治三十二年一月一日の敦夫宛書簡で白鳥は「てにをはの誤り、語調のと、のはざるあらば御報知を乞」としつつ、「近作」として例えば「田家烟」と題して「立のぼる煙にすらも知られけり鄙の住居の長閑けかるとは」など、自作の短歌を十一首したためている。これら書簡中の短歌を引いて後藤亮は「白鳥の歌も、桂園派の流れを汲んでいる」とコメントしているが、白鳥と短歌というテーマについては後藤もそれ以上は踏み込んでいない。

白鳥の短歌でユニークなものとしては「おちこちのたつも知らぬ世の中に、泣きてぞ求む神の御光。」というように句読点を用いつつ(この句読点は後藤亮の引用では省略されている)、キリスト教への信仰を詠んだものもある。また「拙吟」

には喜んで「此二首最感ぜし者」として香川景樹の歌を二首引いている。同日の書簡で「先日植村先生と談じける際は先生は御身の歌を何か（新世紀？）にて読みしとて大いに感じ居られ、景樹の面影あり中々巧みなり」というように、白鳥のキリスト教における師植村正久が、敦夫の短歌を香川景樹風だとして褒めていたことを伝える記述もある。先に引いたが「てにをはの誤り、語調のと、のはざるあらば御報知を乞」とあるように、この時点においてすでに白鳥は、短歌の実力では敦夫には及ばないと考えていたようだ。だからかどうか明治三十三年三月八日の敦夫宛書簡には「予は歌は作れず又作りたくなし／暇あらば芝居の脚本を書かんと心がまへなり」と言い放つてもいる。白鳥と短歌というテーマ、あるいは白鳥における「歌のわかれ」ということを考えるにあたって、敦夫との関係はとりわけ注意すべきことではないか。

明治三十二年十月八日敦夫宛書簡に興味深い箇所がある。白鳥が松浦辰男のもとを訪れ、その談話を書きとっているのである。この談話筆記の中には、門下生の中では「田山花袋が男子では一番です、もう卒業位まで行きました」としている発言が目を引き。また同じ桂園派で御歌所所長まで登りつめた高崎正風を「あれも景樹派ですが、どこも感心しませんが、全体高い位地に立つと知らぬ」者が雷同して、奉つて仕まふから、自分も満足して進まぬ様になります」などと批判している。近代短歌研究の松澤俊二は「実作者・研究者の興味が1890年代に相次いで登場した与謝野鉄幹、正岡子規ら「新派」歌人たちに惹きつけられ」た結果、高崎正風ら「旧派は論・作ともに超克されたと考えられ（略）周縁化されてきた」と述べているが、確かに「旧派」の一人である松浦辰男についても、近代文学研究においては花袋や柳田國男との関係で言及される程度にとどまっている。近代文学における松浦の影響という問題については今後も検討する余地があるろう。

ともあれ、白鳥が書きとつたところの松浦の談話からは、自らもいわゆる「旧派」でありながら、「旧派」に対する批判的な見解もまたうかがわれる。「新派」の代表格たる正岡子規は「只自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本来の主意に御座候。故に俗語を用ゐたる方其美感を現すに適せりと思はゞ雅語を捨て、俗語を用ゐ可」（「十たび歌

よみに与ふる書」『日本』明31・3・4）などと述べているが、そうした主張と以下の松浦の發言を比べてみると、両者は通底することを述べていることがわかる。

そふです、歌は心の誠から出る物で、仮りにも偽は許しませぬ、自分の思ふまゝです。若い物は若い物の様に、女は女の様子に皆心底から吐かねばいけません、其を歌人が昔の歌書を読み、此が名句だ、美しいつて、窃んだり、真似たりし。(略) 仮令地方地方で方言訛などが交るもあれど其は成丈許します、方言などの交れるは、誠のある証拠です。からね、九州の人は九州の人らしく東北の人は東北の人らしくするのが当然です、今の新聞とか雑誌とかにあるのは皆うそを装つた物計りです。(明治三十二年十月八日敦夫宛書簡)

和歌伝統の語彙に拘泥することなく、時には方言といった俗語を歌に取り入れることも良しとし、そうすることで思いをありのままに表現することを目指せといふのである。高弟であった田山花袋が「私の芸術の Realistic tendency の大部分は、実に先生の歌論から得たと云つて差支えない」(『東京の三十年』博文館、大6)とまで述べているように、(ありのまま)に書くといふ自然主義的当為の淵源の一つとして、松浦の歌論を数えることができようし、白鳥においてもそれは例外ではなかつたのである。

偽を廢し正実を尚ぶ所、尋常の歌人とは等を異にする様に候、先日坪内先生の宅に会し文学の談ありし時、先生は文学の美句金章にあらで、真心もて温き同情もて人間の大門カド題に對するを説かれ候が、松浦氏のもの、日本の大批評家たる坪内氏の言に似たる所有之候。(略) 兎に角松浦の考は嘉みす可し。(明治三十二年十月八日敦夫宛書簡)

このように白鳥は坪内逍遙の主張するリアリズムと引き比べる形で、先の松浦の言葉を評価しているのである。

以上のように、この時期の敦夫宛書簡からは、例えば敦夫の師である井上通泰を「あの人も若いのに似合はぬ偏狹なことを云ふ人だ」とし、敦夫に「歌も景樹以上にならねば駄目だよ」（明34・2、日付不明）と助言するなど、短歌に積極的  
に言及する白鳥の姿が浮かび上がる。白鳥の文学的出発点に短歌との邂逅があったことは、十分検討されるべき問題なの  
ではないか。そして不思議なことに、「寂寞」（『新小説』明37・11）以来、文壇デビュー後の白鳥の創作に短歌に言及した  
ような作品は見当たらない。このことは逆にこの問題の重要性を物語っているように思われるのである。

白鳥にとつての（歌のわかれ）とは、いついかなる形で訪れたのであろうか。

### 三

正宗敦夫は備前の生家にとどまつて作歌を続ける。第三高等学校医学部（後の岡山医学専門学校）教授で桂園派の歌人  
である井上通泰を通じ、松浦辰男からも短歌の添削を受けるようになる。そうして敦夫は、井上の弟であり松浦の門下生  
である柳田國男とも短歌を通じて知り合うようになる。柳田は旅行の際、備前に敦夫を訪ねたりもしている。明治四十年  
に敦夫が主宰する雑誌『国歌』に、偶然にも井上と松浦とが双方を批判しているかと捉えられるような文章が同時に掲載  
されてしまう。このことで井上と松浦との確執に敦夫も巻き込まれてしまう。ある意味このエピソードは、敦夫が短歌の  
世界に浸りきっていく過程をも物語っている。一方で白鳥の言説からは、短歌への積極的な言及が消えていくのである。  
柳田國男との出会いを回想して、白鳥は次のように述べている。

柳田國男氏にはじめて会つた時は、私はまだ早稲田の学生であつた。私の弟が、当時岡山の医学校の教授であつた



井上通泰先生に和歌を学んでゐたので、その関係から、私は弟に頼まれて、國男氏に、誰かの短冊を貰ひに行つたのであつた。(略)短冊については、私に興味がなかつたので、その時の和歌の話は記憶に残つてゐないが、西洋文学について、彼此と、興に乗つて語られたことは、今なほ懐しく思ひ出されるのである。(『現代日本文学全集』十二巻、月報、筑摩書房、昭30・1)

西洋文学については「興に乗つて」語り合ひ、そのことは「今なほ懐しく思ひ出される」というが、一方「和歌の話は記憶に残つてゐない」というように、七十歳代の半ばを越えようとする白鳥にとつて、短歌への回想は幾分素気ない。白鳥と短歌というテーマを考へるにあつて重要と思はれる作品は「田園風景」(『群像』昭21・10)である。少年期の回想から始まり、父の死後、弟との家督相続をめぐるやりとりにもまで説き及ぶ小説だが、後藤亮や松本鶴雄など多くの論者がこの小説を取り上げてきた。それは先に触れたように、主に家督相続をめぐる敦夫との確執を探るといふ論点においてである。しかし、この小説にはまさに〈歌のわかれ〉が描かれており、このことはこれまでの研究では主題化されてこなかつた。

幼少の「私」は二歳違いの弟Aと二人、郷里の裏山に登り、互いに和歌を作ろうと誘う。

私は、目に映る山海の眺めや花鳥の姿に一理屈ある観察を下して、三十一文字で言ひ現さんと努力したのであつたが、それはいかにも無風流で、歌らしい味ひのないものと、幼な心にも思はれた。これに反してAの方は、雑作なく、二つ三つと、歌らしい歌を作つて、調子をつけて口ずさんだ。「誰かに聞いた歌ぢやないのか。」と、私は詰問した。Aにそんな才能があらうとは信じられなかつたのだ。「誰れにも聞きやせん。今わしが作つたんぢや。」と答へて、Aは興に乗つてゐたようであつた。読書好きで、本の上の知識は年齢不相応に有つてゐた私も、和歌のやうなものを作

るとなると、Aに及ばないことを、その日はじめて知つたのだが、それは、弟から重要な事を教へられたやうなものであつた。「本の知識だけでは歌は作れない。」（『田園風景』）

年齢不相応な読書量への自恃と、長男として「惣領としての特権」を無意識に感じてきた「私」だが、Aとの間の短歌をめぐる実力差を通じて、自らの優位性が相対化された。そして「私の家では曾祖父の頃から、封建時代程度の風雅の道に入つてゐて、家族近親が甚だ低調な和歌や狂歌を楽しんでゐ」たが、「Aにもさういふ祖先の遺伝でおのづから歌心を具へてゐたのであらうか」と「私」は考える。祖先伝来の正当な後継者は「私」ではなく「歌心を具へ」たAであり、その姿はやがて家督相続をめぐるライバルとして「私」の前に浮上するAを先取りしていたのである。

しかしこの場面から端的に想起されるのは小説「入江のほとり」（『太陽』大4・4）にある以下の場面ではないか。「入江のほとり」の主人公辰男は地方の旧家に住まいつつ「世間には通用しさうでない」英語の独学に耽つている。そこへ長兄栄一が帰郷し、辰男を誘つて裏山へ散歩に出かける。辰男は山頂から村と海を見渡すが、彼の目には世界は次のように映つている。

目の下の墓地も、海を渡つてゐる鳥の群も、辰男には皆英文の課題としてのみ目に触れ心に映つた。飛んでゐる五六羽の鳥は鳶だか雁だか彼れの智識では識別けられなかつたが、「ブラックバード」と名づけただけで彼れは満足した。「辰は英語を勉強してどうするつもりなのだ。目的はあるのかい。」冬枯の山々を見渡してゐた栄一はふと弟を顧みて訊いた。

ブラックバードの後を目送しながら、「飛ぶ」に相当する動詞を案じてゐた辰男は、どんよりした目を瞬きさせた。直ぐには返事が出来なかつた。（『入江のほとり』）

「田園風景」の「私」が、目に映る「山海の眺めや花鳥の姿」を「三十一文字で言ひ現さんと努力」しているように、「入江のほとり」の辰男は「目の下の墓地」や「海を渡つてゐる鳥の群」を英文によって「言ひ現さんと努力」しているのである。山頂から眺めつつ行われる二人の営為は、既知の言葉で世界を翻訳するという点で共通している。つまり和歌を詠むことと英作文を作ることを、アナロジーの関係で捉えることができるのである。

「入江のほとり」で栄一が辰男に「娯楽にやるのなら何でもい、訳だが、それにしても和歌とか発句とか田舎にゐてもやられて、下手なら下手なりに人に見せられるやうな者をやつた方が面白からうぢやないか。他人には全で分らない英文を作つたつて何にもならんと思ふが、お前はあれが他人に通用すると思つてるのかい」と詰問しているが、辰男の英語を論難するに際して「和歌とか発句」を引き合いに出していることは、きわめて象徴的なのである。「私」の和歌が「無風流で、歌らしい味ひのないもの」、歌の格好をした歌たらざるものであることと相即して、辰男の英文は「他人には全く通用しさうでないもの」、英語たらざる英語であつた。そのことをまざまざと知らしめるのは「私」にとつても辰男にとつても、それぞれの弟／兄なのである。

ある表現手段を手放さざるをえなかつた彼らは今後どうなるのか。辰男のその後は作中に書かれていない。一方「私」はどうか。以下の記述に手がかりがある。

私は古い広い家のあちらこちらの部屋に古机を据ゑて読書に没頭してゐたが、兄弟で机を並べるやうなことはなかつた。一人で一つの部屋を占領してゐた。そして、読んだ小説や歴史や伝記の話を、AやTなどに話して聞かせた。

自分で読んで楽しむだけでは物足りなく、弟たちに話して聞かせて、彼等がそれを面白がつて聞くのを喜んでゐた。（田

園風景）

あたかも書齋のごとき空間で小説・歴史・伝記——すなわち散文——を読み、それを再構成して弟たちに聞かせること。そしてそこに喜びを見出すこと。ここに「私」の一つの表現行為の始まりが描かれているのである。言い換えると詩的なものに見切りをつけ、散文家、物語作者として生きていくであろう「私」の姿が予見されているのである。

#### 四

若き日の白鳥は短歌における敦夫との実力差を自覚し、やがて短歌から離れていく。六十二歳になる白鳥が帰省した際、「窯を築いて瀬戸物を焼いてゐる」甥に「焼物に字を書いて呉れ」と頼まれる。白鳥は「彼れの焼物にいや／＼ながら下手な字を書いた。かういふ場合に、和歌や発句を作る習慣を私は憎悪する」（『晩春日記』『新潮』昭16・6）と述べているが、こういったエピソードからも、短歌への強烈な苦手意識を長年抱き続けたことがうかがえる。

そもそも、例えば敦夫との短歌における実力の違いとはどこに由来するのか。言い換えると、白鳥は短歌についてどのようなことが視野に入っていないかつたのか。それは先に引用した松浦辰男の談話筆記とそれに対する白鳥の感想、そこに現れた関心の所在に答えがある。白鳥は松浦を評価して「偽を廃し正実を尚ぶ所、尋常の歌人とは等を異にする様に候」と述べている。こうした観点によって松浦を評価する白鳥だが、これは「吾人は小説に関する見解で最も意義あり、明治文学史発展の上に忘るべからざる者は、「小説神髓」以来では小杉天外氏の写実主義（初姿？の巻頭にあつた自然は善でもない悪でもない、だから有のまゝに描けばそれでいゝと云つた説）と花袋氏が「野の花」の序文以来頻りに説いた議論だと思ふ」（『蒲団』合評『早稲田文学』明40・10）といったような、逍遙や、天外、花袋らの主張に対して示した白鳥の共感と相即している。一方で白鳥が書きとつた松浦の発言には「調ですか、此は中々云難ひ者で、よ程深入りして心得のある人でなくては分りません。マア、心の香とでも云ますか、例へて見れば下宿屋で下女が返事をして、其ハイと云ふ

一言が調子次第で、心持よくも、聞苦しくも、あるのですナ」という箇所がある。「調」つまり韻律や音調の難しさということ松浦は述べている。ところが白鳥の感想からはこの観点への言及が抜け落ちているのである。それは「田園風景」でAが和歌を「調子をつけて口ずさんだ」ことによって、自らの「歌」の貧しさを思い知らされたこととつながるのではないか。

柳田國男は、松浦から受けた教えについて「先生は何べんも吟じてみて、その上で落ち着く所があると信じられていた。かりそめにも天分というものは信ぜず、印象をうけて直ぐ歌となるといふ風ではなく、吟じている中に自ずから調の出来るものと考えられていた」と追懐している。松浦は吟じることの大切さを日頃語っており、それは柳田の記憶に深く留められていたようだ。それに対して逍遙を読むように松浦の発言を読む白鳥は、なるほど「歌」というものから疎外された人であったかもしれない。

ここでもう一度、最晩年の白鳥の歌会始を陪聴しての感想に触れたい。「この会で朗詠だけ聞いてみると言葉の意味はよくわからない」のだが、それでも和歌というものは「詞句の意味だけでなく、詞句が音楽化して人の心を動かすことになるのであらう」（「歌会始め」陪聴記、前掲）と述べている。この発言は短歌における音調の重要性を自覚していることを表していると同時に、「意味」を表す手段としての短歌の限界を語っている。さらに白鳥は続けて「会場は寂としてゐた。身に染み心に染みてあの朗詠に感歎してゐたのであらうか。宮中における古典的歌謡曲として、ひそかに退屈しながら、つくられたる謹聴をあへてしたのであらうか」というように、歌会の「退屈」さをほのめかしているともとれることを書き添えているのである。もはや晩年の白鳥において短歌に対する葛藤は、過去のものとなっていたのだろう。

しかしそれでもなお、短歌に対する白鳥の思いとは、否定的なものばかりではない、アンビヴァレントなものとして彼の中で存在し続けたのかもしれない。最初に紹介した短冊は昭和十一年ころ揮毫したものと考えられるが、その前後の白鳥は積極的に旅行に出歩いている。昭和十年に北海道・樺太に旅行した際、樺太で先住民の民謡を読み「万葉集に収め

ても見劣りしないやうな素朴な詩趣を具へてゐるのではあるまいか」(『北遊記』『中央公論』昭10・8) という感想を洩らし、民族を問わず誰もが歌を詠むということに思いをはせている。

小説「田園風景」の中で、第二次大戦前「わが故郷の海岸一帯は軍用品の工場地となつてゐて、石炭の煙が藻塩焼く煙のかほりに、濛々空に漲つてゐた」というように、故郷が大きく変貌を遂げてゐる様を描いてゐる。それも「石炭の煙が藻塩焼く煙のかほりに」なつた、といった比喻を用いてである。そして「賤が伏屋」「蟹の小舟」「藻塩焼く煙」など、昔の和歌の常套語は、今の故郷の風景には当て嵌らない死語となつてゐるのである」と述べてゐる。これは「和歌の常套語」によつては覆うべくもない流動する現実を述べ、歌の限界を述べていると同時に、「和歌の常套語」を「死語」たらしめた現実を嘆いてもいるのだろう。白鳥の短歌へのコミットメントは表面的には姿を消すが、一方で〈短歌的なもの〉は彼の価値判断を形作るものの一つとして密かに生き続けてきたのではないか。

#### 注

- (1) 花袋と短歌については丸山幸子「花袋と短歌―花袋と国男・同根異道―」(『田山花袋記念文学館研究紀要』第21号、2008・3) など、氏の諸論に詳しい。花袋が生涯詠んだ短歌は、実に四千七百首を超えるのだという。
- (2) 後藤亮『正宗白鳥 文学と生涯』(思潮社、1970)
- (3) 松本鶴雄『ふるさと幻想の彼方―正宗白鳥の世界』(勉誠社、1996)
- (4) こういった白鳥の先祖にあたる人々については、磯佳和『伝記考証 若き日の正宗白鳥―岡山編―』(三弥生書店、1998) などを参照。
- (5) 後藤亮、注2と同。
- (6) 松澤俊二「明治期日本の和歌と〈政治〉―高崎正風を中心にして―」(『桃山学院大学社会学論集』45(2)、2012・3)
- (7) 敦夫と松浦らとをめぐる関係については吉崎志保子「階上階下すべて書にして 正宗敦夫の世界」(吉崎一弘、1989)、兼

清正徳『桂園派最後の歌人 松浦辰男の生涯』（作品社、1994）、赤羽淑『正宗教夫をめぐる文雅の交流』（和泉書院、1995）を参照。

（8）柳田國男「旧派歌がたり」（『柳田國男全集』34、筑摩書房、2014）

〔付記〕

小野田太久造氏のご令孫からは、短冊の掲載を承諾頂いたばかりでなく、お忙しい中お話をうかがうことができ、かつ貴重な資料をご教示頂きました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

（文学部助教）